

第三章 消防と警察

一 消防

(一) 火災の記録

年 月	場 所	記事概要
寛文七(一六六七)・一二・一四	佐喜浜	五十余戸焼失
寛保二(一七四二)・一・一二	室津浮津	詳細別記
寛延元(一七四八)・一・一〇	佐喜浜	一五〇戸焼失
宝暦元(一七五一)・一二	浮津	大火あり
〃一三(一七六三)	羽根	火災起こる
文政元(一八一八)・四・二	津呂	火事

上表は『高知県歴史年表』に記載せられている火災記事であるから、大火であったと思われる。このうち寛保二年の室津浮津浦の大火については、久保野家の記録に次のように書かれている。

寛保二年正月十二日夜、浮津八幡宮ノ西、松本庄兵衛宅ヨリ出火し室津浦ニ延焼シ、御免并ニ御免ノ端ニ小家少ニ残ル。其他

多田半之丞前ノ家迫焼失セリ、尤モ酒屋(境町)、願船寺、庄兵衛宅ヨリ御分一迄残ル。御免ノ端ニ小家少ニ残ル。其他ハ皆焼ケタリ。其被害高左ノ如シ。

- 一、家数 二百八十二軒
- 内 百十二軒(室津分)

百七十軒(浮津分)

御分一は、現在の室戸水産会館のあたりに在った。

明治・大正 昭和に入るまで、火災が起こると広範囲に類焼し、大きな損害を受けた。それは、消防ポンプ、の 火 災 水道と消火栓等の消火設備が整備されていない上、藁屋根の木造家屋が多かったためである。

罹災民を救助す 佐喜浜大火詳報

去る廿四日、安芸郡佐喜浜村字都呂、某家雪隠の積糞より発火し、折から東北の強風に火勢猛烈を極め、火は忽ち八方に広がれり。斯くと見たる各部落民は、すは大事と駈つけ本村壮年会員、村役場員と協力必死の姿にて極力消防に務めたれ共、如何せん強風に煽られ見る／＼火の手は益々広がり、全部落の全戸数七十九戸の内三十三戸類焼せり。しかして当日は、晴天昼間の事として罹災民の大部は不在の為、本年収穫の米俵家財全部を取り出す能はざりしもの多数ありて、悲惨此の上なし。原因は、今に不明なるも、多分失火なるらしく右に就き植松全村長は、村会議員、区会議員を召集し、

- 一、各部落より住居に要する藁木材縄其の他の材料を持ち出し、雨露を凌がす事
- 一、各部落より金五拾円づつ寄付する事

の二件を決議し、早速罹災民の救助に着手せるか、又根丸部落は小屋掛に要する材木を寄付し、尾崎部落は木材を持出し小屋掛をなし、全村植村嘉寿馬氏は自己所有の山林より杉丸太を運搬寄付し、罹災者の各得意先よりは衣類其他の日用品を寄付したる為め、目下のところ罹災民は親族朋友の家に身を寄せ居れり。衣食に窮するもの七・八戸に過ぎず。是等は皆親族の助けを受け居れり。尚村に於ては県へ救助を申請する筈なり。

(大正二・九・二九「土陽新聞」)

年 月 日	場 所	記 事 概 要
明治 九(一八七六) 〃 一五(一八八二)・一・一三	佐喜浜	佐喜浜八幡宮全焼 大火

室戸市20年間の火災状況 (昭和40~59年)

区分 年別	建物						合計	損害額 千円
	建物	林野	車両	船舶	その他	合計		
昭和40年	2	2				4	22,600	
41	7	3	2			12	20,720	
42	2	4				6	7,105	
43	4	9				13	7,077	
44	13	5	1	1		20	10,344	
45	15	11	2	1	1	30	27,737	
46	10	8	1		1	20	66,190	
47	11	4	2		2	19	9,209	
48	7	5	1		4	17	23,563	
49	5	3	1		4	13	9,630	
50	14	4	1		11	30	62,727	
51	7	2			4	13	26,974	
52	10	2			5	17	41,650	
53	11	4	1		4	20	36,960	
54	11	1		1	4	17	67,580	
55	6	4	1		1	12	168,873	
56	9	2	1	1	1	14	31,975	
57	9	3	1		1	14	40,705	
58	8	5			1	14	85,245	
59	6	2			3	11	4,130	

昭和四十年年度から二〇年間の火災の状況を表で示す。

昭和四十六年二月九日の吉良川の山火事は約二〇〇ヘクタールを焼き、五十五年二月十三日から十四日まで一昼夜以上にわたって燃え続けた佐喜浜の山火事も二〇〇ヘクタールを焼いた。

昭和三十八年四月五日未明、室戸岬町耳崎の製材所から火を出した火災は、またたくまに一六棟を全焼した。

(吉良川郷土基本調査七)

のは燃え、焼けるものは焼け、然も風次第に弱く及びさしもの火勢も漸く衰えを見せた機に乗じ、村民総出動で消火に努め、二十六日に至って全く鎮火するを得た。焼失区域は前記の外、千代岡山、天王、アス谷、笠木東平、クエの峯等其の面積百六十八町七反、損害見積額六万六千円にのぼった。然し、焼失林野が主として薪炭採取の雑木山や萱芝山が多く、損害が案外少額ですんだのは不幸中の幸であった。

昭和三年の大山火事

全年二月二十四日午後二時頃、巻谷口より出火、折からの烈風に煽られて忽ち古庵山をなめつくし、火勢愈々猛烈に、急を聞いて直ちに馳せつけた消防組其他数百人の村民も施すに手なく、ただ拱手傍観する外はなかった。かくて夜に入っても火勢少しも衰へず、黒煙紅焰天に沖して物凄く遠く田野あたりより火焰が見えたといふ。翌二十五日に至り燃えるも

年 月 日	場 所	火 災 概 要
昭和 三(一九二八)・二・二五	吉良川	七〇〇町歩焼く。傍観の外なし
六(一九三一)・二・一九	三津	納屋一二、住家二焼失
二七(一九五二)・一・二六	羽根上段	全半焼二三戸(九九九)
三一(一九五六)・二・二二	田の中	全焼二七戸、半焼二
三二(一九五七)・三・二一	室戸岬町山林、日沖より六五〇町歩焼ける	
三八(一九六三)・四・五	耳崎	一六棟全焼

昭和期 昭和三年、吉良川の山火事については次の記録がある。「土陽新聞」では焼失面積七〇〇町歩との火災あり、大きな違いがみられるが、ともかく記憶に残る大山火事であった。

明治二五(一八九二)	津呂	津呂の西方全焼
三二(一九一九)・一・二八	崎山	西寺放火により本堂、庫裡等全焼
三四(一九〇一)・二・一一	元	人家五戸外十数棟全焼、人家をこわし火道を切って消火。反物、古着等盗まれる
四〇(一九〇七)	津呂	漁業組合全焼
四三(一九一〇)・二・二八	佐喜浜	浜の火事。子どもの火遊びによる。数十軒の浜納屋、港畔の老松を全焼
四五(一九一二)・一	都呂	人家約六〇戸、納屋等部落のおよそ八〇パーセントを全焼。宝泉寺阿弥陀如来の奇跡が伝わる
大正 二(一九一三)・九・二四	都呂	七九戸中三三戸焼失

第七章 災害

一 地震

(一) 古代・中世の地震

室戸といえ、台風が連想されるのは、あなたがち測候所があつて、テレビ、ラジオで全国に放送されるからだではない。古来多くの地震や台風が襲い、多大の被害を被ってきた歴史を持っている。

白鳳の地震

『日本書紀』によれば、天武天皇の白鳳十三年(六八四)の条に、「冬十月十四日任辰、亥の時に及んで、大いに震う。国を挙げて、男女叫びまどいぬ。則、山崩れ、河漏れ、諸国郡官舎、及び百姓倉屋、寺塔、神社、破壊の数、あげて数うべからず」とあり、有史以来の最初の巨大地震である。特に、土佐にとつて、最も興味深いのは、「土佐国田苑五十余万頃没為海」の記載である。『頃』の字は、『日本書紀』では、『しろ』と訓読してあり、今日の、およそ一二平方^{キロメ} (一一五七町歩)に当たる。五〇万頃とは、数字があまりに大きい、県下には、各地に言い伝えとして残っているものが多い。「黒田郡」の陥没はこの地震によるもので、「白鳳地震の陥没は、東の方室戸岬より、西の方足摺岬に達する黒田郡と称する一円の大地なり」とし、黒田郡を「黒田、黒土、上鴨、下鴨の四郡に分け石高二十六万石程の地」という細かいものや、陥没の音が京

西南日本外側地震帯における著名大地震

数	発 生 年 月 日	震 域	緯 度	経 度	M (マグニチュード)
1	天武13. 10. 14 (684. 11. 29) 〔白鳳の地震〕	東海、南海(土佐) 西海	32. 35°	134. 0°	8. 4
2	仁和3. 7. 30 (887. 8. 26)	京都 五畿 七道	32. 55°	135. 0°	8. 6
3	承德3. 1. 24 (1099. 2. 22)	土佐 奈良 京都	33. 0°	135. 30°	8. 0
4	正平16. 6. 24 (1361. 8. 3)	畿内 南海道一部	32. 50°	134. 40°	8. 4
5	明応7. (1498. 9. 20)	東海道全般	34. 10°	136. 0°	8. 6
6	慶長9. 12. 16 (1605. 2. 3)	東海、南海 西海	33. 00°	134. 30°	7. 9
7	宝永4. 10. 4 (1707. 10. 28)	東海、畿内、南海 および東山、 西海の一部	33. 10°	135. 35°	8. 4
8	安政元年11. 4 11. 5 (1854. 12. 23 //. 24)	東海、東山、北陸 山陽、山陰、南海 西海	34. 00°	137. 50°	8. 4
			32. 40°	134. 15°	8. 4
9	昭和21. 12. 21 (1946. 12. 21)	南海、紀伊半島	33. 00°	135. 20°	8. 1

(注) 上記はM8. 0以上の南海大地震である。
上記のうち、土佐沖に震央があるのは、5以外の8大地震である。

都まで聞こえたという
愉快な口碑もある。
土地の陥没や隆起を
伴う地震には、当然に
津波が考えられ、甚大
な被害が考えられる
が、その記録は見当た
らない。

仁和・正平 白鳳の地震以後、慶長の地震まで、九二〇年の間に起こった地震の中で、特に大きいものは、白鳳の地震以後二〇三年を経て起こった仁和の地震と、さらに、四七四年後に起こった正平の地震

の二つで、いずれも、津波を伴っているから、外側地震帯の活動であることにはまちがいが無い。土佐の被害についての記録は見当たらないが、正平の地震では、兵庫県、徳島県に津波の被害が殊に多く、流失家屋、死者も多かったようである。

(二) 近世の地震

慶長の地震

正平の地震後二四四年の慶長九年（一六〇四）十二月十六日の夜半、亥の刻（午前一〇時ごろ）に起こった。この地震は、震源が一つは房総半島沖であり一つは土佐沖であったという二元的地震で、共に地盤変動があり、津波が生じたために死者が多く出た。被害は、南は九州南部から関東南部の広い地域にわたっている。

土佐では、山内一豊が関ヶ原の戦いのあとに藩主として封ぜられた直後のゆえにか、記録が少ないが、著名な日本の文献ともいえる「暁印の置文」という記録がある。

安芸郡崎之浜（現在の室戸市佐喜浜）談議所の住僧（権大僧都・阿闍梨）暁印の置文は、奥宮正明の『谷陵記』、武藤致知の『南路志』、宮崎竹助の『三災録』に、それぞれ収録されていて、貴重な記録である。少し長文であるが、次に掲げることとする。

暁印の置文

安芸郡崎之浜談議所之住僧、権大僧都・阿闍梨・暁印、于時、慶長甲辰国々諸雜言置事。

將軍大閣秀吉の御息・秀頼と申、御年十三才、御幼少故、三河国松平家康と申は日本第一の弓取なり。然らば、大閣秀吉御他界の時、秀頼御幼少の間、御世を家康へ譲預させ給ひて、公家となされたまひて内府と申し、御世を納められ、日本

の將軍に成給ふ。加へ・我朝握恣掌中。諸国の大名小名つかへ奉ること無比。

去る遠江の国、山内対馬守と申御侍。土佐国御知行取らせ給ひて、一國靜謐に納め玉ふ。当時、崎浜の代官、此の対馬守殿御内、富永頼母と申す御侍代官にて仕へたまふ。

慶長九年は如何なる年の逆旅ぞや。

先づ一番に七月十三日。不時とみに大風吹き来り、洪水湧き、山の竹木を吹き倒し、もろもろの作物根葉を枯らし、家徹塵に吹きなし、山は河となり、瀬河は山と埋れ、人の首も、吹き切るほどの大風なれば、深山幽谷の土民等、木におされて死するものあり。或は半死半生の消息、凡そ国土の人民何万とはかられず。二番は秋八月四日。大風洪水、浜の砂を吹き上げる。

三番閏八月廿八日に又大風洪水す。

四番に十二月十六日の夜、頓に地震す。其の夜半ばかり、四海浪す。大潮入れて、国々の浦浦は破損滅亡す。崎の浜にも男女五十人余、波に流死す。其の内、代官の下代津の国、山田之庄郷、山田助右衛門殿と申侍、蓋し如何なる過去のみくいぞや。夫婦息子、浪に取られて朝の露と消え給へ。歎きても余りあり。無残なる哉いと惜しき哉。愁傷悲歎の涙なり。隣在所を聞くに、西寺・東寺の麓の浦分にも、男女四百人余死す。

甲浦は三百五十人余死す。

安喰には三千八百六人余死。

この時、野根の浦は仏神三宝の加護にやあらん潮入らず、七不思議と云ふべし。蓋、伝へ聞くに、東を受け、南向きの国は皆潮入る。西を受け、北を受けたる国には心動地震ばかりにて、潮入らず。是を未来末代の言伝に書置也。

右の時、在所庄屋は安岡吉左衛門也。談議所、讃岐国福宗の住人権大僧都・暁印と申客僧居合申、有為目を見、すなはち、此置文作る筆者也。

汐の入時は談議所の阿弥陀堂の皮め木の上（一本に沓ぬぎの上）迄入る。

中里、鍛冶次郎左衛門がつほ迄入る。川は船場の名木の出川迄入る。（今大山に浪切不動立つ）八幡の大権現のらんかんの北の橋を打ちつづる也。

なお、宮崎竹助の『三災録』によると、阿波国海部郡鞆浦（現海部町）に立石という高さ一丈余の記念碑がある。慶長地震について、当時の状況を知るうえに、大きい参考資料である。

慶長九年辰年の十二月十六日、亥刻、常の如く月白く風寒し。行歩氷る時分。大海三度び鳴り、人々大いに驚ろき、手を拱くところ、波浪頻に起る。その高さ十丈。来ること七度び、名づけて大潮と云ふ。刺之男女千尋の底に沈む者百余人。後代への言伝へのために。

海岸地形が南東向きの地に津波の被害が多かったことは、「暁印の置文」に書かれているとおりで、現代においても十分に考えておいてよいことであろう。

宝永の地震

慶長地震後一〇二年、宝永四年十月四日の昼過ぎに起きたこの地震は、震動地域が、日本三十余国に及ぶといった大地震であった。沢田弘列の著した『万変記』によると、当日から翌日にかけて、十一、二回大津波が襲ったようである。

余震が三年も続き、その度に高潮状態が起こった。同年の十一月二十二日には、有名な富士山の噴火があり、土佐にも灰が降ったと伝えられている。

当時の土佐藩主山内豊隆からの幕府への訴えには、損害高として、

流 家	一万一、一六七軒
潰 家	五、六〇八軒
死 人	一、八四四人
死牛馬	五四八疋
損 田	四万五、一七〇石余
米流失	二万二、一二〇石余

となっている。

土地の隆起、陥没などの変動もあり、高知城下以西で、陥没二一か所、以東で一か所の隆起であると記録されている。

この隆起は、室戸半島であって、著しい南上がりの変動であり、久保野繁馬の『室戸港沿革史』によると、室津港の深さは地震の前後で次のように大きな変化がみられ、一斗以上も浅くなったようである。

宝永の地震前（一七〇七）	
満潮	港内一丈四尺 港口一丈二尺
干潮	港内八尺五寸 港口六尺五寸
宝暦九年（一七五九）	
満潮	港内八尺七寸 港口六尺九寸
干潮	港内三尺八寸 港口二尺二寸

安永七年の『磯辺のもくづ』には、室津の港の状況を、

室永四年丁亥の変に由り、港口に大石現れ、現在干潮にも水深一尺を剩すのみにて、船舶出入の大支障となる。とある。

第7章 災 害

室戸地方における被害の状況では、武藤致知の『南路志』や、町村史によると、羽根では、「羽根浦八幡宮板書」に、「未刻俄に磯より沖え三丁余も潮干、其より大潮入る。財宝尽く流失、達者でない者や、逃遅れたる者は残らず大潮に引かれ死」とあり、檜垣左近右衛門の記録によると、当日は晴天で大地割れがあり、家が壊れ下敷きとなったり、婦人は目まいがして死んだり、山崩れなどで死者が相当出ている。未刻に磯から三丁余も潮が引き、たぐさんの死者を出し、高知近辺は大潮が石淵から城下まで入り、大道筋を船で往来し、その船賃二〇文とある。奈半利は野根山の大道下に十二、三反の廻船が打ち上げられ、羽根浦では尾僧新町（戎町か）船場前は

波打ち際から一町半、川筋は四丁余潮が上がり、四日から二十日まで大潮が入っている。尾僧戎町の者は後ろの一段高い田に小屋を造って住み、船場の者は一段高い山の下や平野山に上がっている。

『谷陵記』によると、吉良川には特に大きい被害はなかったようで、元では、「磯辺の家少し流る。潮は田丁三ヶ一迄、慶長九年の潮より六尺卑し」という。

室津においては、港番久保野家に伝わる文書によると、

宝永四亥年十月四日午の刻、晴天大地震、所々山崩る。大地耆尺より下われ、水がたきの如くにこり出る。同末の刻大潮入る。室津浮津の内水尻、耳崎多田助丞前ノ大道越戸より潮入、家数式拾三軒港ノ内へ流れ入・又奈良師家五軒・元分家二軒・都合三拾軒流レ・地下人耳崎浜にて式人流死……云々

津呂では、港が隆起して、干潮には船の出入りが困難となったが、人畜に被害は少なかったと伝えられている。

佐喜浜においては、「晝印の置文」（慶長地震）にのちの人が書き添えたものとして、

于時、宝永中ひのとい、十月四日大地震、此処板葺家ゆれ乱れ、屋根より石落ち、けが人多し。大地十間、二十間大割れ申し、地より水湧き出で、雪隠ごえ上り、山は崩え人民驚き或は氣を失ひ泣きわめく事只蚊の鳴くが如し。或は寺山観音へ逃げ走り、皆、道具まで運び、或は戸障子にて仮屋を建て、十日程住ひ住り、右大地震、北南へゆり申せし故、大汐は上へのぼり、上は甲浦よりかみへ入り、野根は入申さず、当浦（佐喜浜浦）は波止下へ汐打入った。

とある。震度は非常に強かったが、負傷者が出た程度で被害は少なかった。

室永四年は丁亥の年であるので、この地震は俗に「亥の大変」ともいわれている。

安政の地震

宝永の地震のあと、一四七年を経た安政元年（一八五四）十二月二十三日から四日にかけて（旧暦十一月四〜五日）、マグニチュード八・四の大地震が起きた。震域は房総半島から九州に及ぶ一

六か国、津波の被害一四か国に及び、特に十二月二十四日（旧十一月五日）の震動が大きく、三十余国に及び、家屋の被害七万戸を超え、死者三万人に達したという。

土佐藩主山内豊信から幕府への被害に対する報告によると、

潰家	二、九三九軒
半潰	八、八八八軒
焼失	二、四六〇軒
流失	三、一八二軒
死者	三七二人

となっている。室戸方面においては、南ないし南東上がりの著しい隆起がみられ、室津では約四尺（一二〇センチ）隆起している。

浮津八王子宮の「当家記」によると、

「五日（旧十一月五日）七ツ半時（午前五時ごろ）稀なる大地震、津浪入、大変に及び、誠に恐驚至極。一統我先に立退事のみ大騒になり候。誰となく只右往左往にて山へ山へと逃退いた場合——西の方から大音にて申し来るは……引潮激しきにつき、片時も油断為し難しと……易からざる次第に成り行き——既に奈良師の前のシバエ（師婆）と申すは、昔より見たる人無きに、戻の度は寤の根より長さ一丁ばかり山の如く相見え候……」

室津港の潮四尺ばかりも足り申さざる様に相成りて、両津（室津・津呂）は申すに及ばず、諸船入津出来申さず、指つかへ……」

というように、地盤の隆起をみた。

この地震後、安政四年二月下旬から港の改修工事が始まった。

また、元脇地の坂本勲氏の曾祖父十郎（当時二二歳）の書いた「大地震洪波事記（大ぢしんつなみの事しる

す)「が現存し、当時の模様を詳しく伝えている。

于時、嘉永七歳寅十一月四日(不明)時(嘉永七年は改元して安政元年)近年珍ら敷地震いたし、皆々大氣におどろき候処ざしてのことも無御座候と皆々安心致候処、其日は無事に有之候処、其翌日五日ひる七ツ半時頃、十郎三津鯨場用事にて参り申候て、保馬様より御酒押領被仰付御馳走被下候て、直様七ツ頃宿元へかへり申候処突は大酒仕、前後もしらず、たどりたどりて、帰宿致候処不計蔵戸の宮の下に少き川有、於此所大地しんいたし、道中あることかなはず、やうやうと山中虎衛門殿のほとり迄参り候処、早、蔵のひさしおち、僅に其時は、も早死るは今なるかと、みのけもよだつばかりに候処、大分やはらぎ候て、それより直様足に任して、浮津に参着しけるに、数人、中道寺山へ逃げ登りける。皆々浮津の人の言分には、早藏がした(引いた)といふて、洪波がくるとそのさはがしき事言ふばかりなし。それより十郎浮津西町に行ける処に、人々町中に雨戸を敷、その上に坐する者もあり、逃る者もあり、その有様目もあてられぬ次第なり。それより十郎足に任して岩戸、奥宮さして急ぎける処に、浮津の磯田のほとりより浜を見物いたし候処、沖に有之諸人存じ候通り、しばいの石と申て、山の如く見え、浜は壱町余りしほ引、しばらく見物いたし候へども、余りおそろしく候て、小山の方に逃行候て、ようすを見合候処、波山のごとくなりて、なら師川へ打込あり、おそろしく事いふばかりなし。且又、大地蔵(今は造船所跡)のほとりは大海となり、これより十郎行くことかなはず、浮津有之長仙寺山五合目迄登り、ようすを見合、岩戸さし行ける処、岩戸御家内様早御本家へお出被遊、あとさして行ける処に、不計、岡山五合目へ逃登りけるようすを見合、御本家へ行けるに、川はわたりせど、波打込橋の下迄波来り候…それより、御本家へ行けるに、屋敷外かは嵜さしかけ、あるいは長屋のかはら七分どほりおち、皆々様御家内様、山王様へ、西の方の桜の木の下へ戸いた、畳などを敷御出被遊、その夜四つ頃、又大きな物ゆり申候。

これより、六月七日…廿九日、朔日、十二月二日、三日、四日迄地しん致申候

皆々ハキ地(脇地)の人は崎山へ逃登りける。あるいは元坂の平常作りの田へ、みなみな小き小屋を打、十四五日暮しける。皆々大氣にめいやくをいたし申候

地震の際、八王子宮の境内の石灯笼と狛犬が倒れ、御影石の鳥居も一本折れ、中の通りぬきも折れていたといふ。

室戸岬では、十一月五日は空よく晴れて、暖かい小春日であった(室戸地方では、いずこも同じように上天気であった)。七ツ時(午後四時ごろ)地震が起き、あとに大潮が入り、人々は山の高地へ逃れた。津呂庄屋多田五郎左衛門信量の手記によると、年寄役四手井重之丞の土蔵へ、山から大石が転がってきて、壁が大破したとあり、地盤隆起のために津呂港が浅くなり、船の出入りが困難になった。

佐喜浜では、波が川伝いに押し寄せて、小山の土手、波切不動の辺までに至った、中里の「木の宮」の大杉が大揺れに揺れて、大地をたたくように見え、津波の引いたあとには、この杉の上に、太刀魚が引っかかっていた、と清岡秀璞の手記にある。

安政の大地震の前(四二年前)に、土佐では文化九年(一八一二)に相当大きな地震があったので、安政の地震までには破壊箇所や家屋も相当に修築され、経験も新しかったこととて、大地震ではあったが、被害は比較的に少なかったことと思われる。

安政元年は甲寅(あまとら)の年であるので、この地震は俗に「寅の大荒れ」ともいわれている。

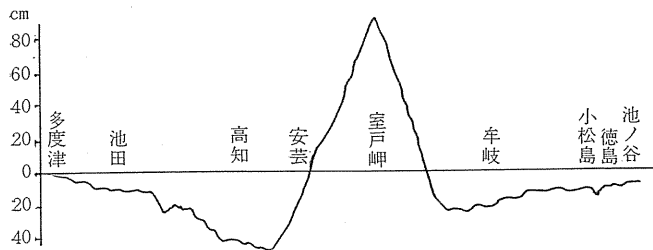
(三) 南海大地震

太平洋戦争の戦禍の残る昭和二十一年(一九四六)十二月二十一日、午前四時過ぎ、突如として大地震が襲った。正式には南海道大地震という。震源は和歌山県潮岬南南西七八キロメートルの海底で、県下の平均震度五の強震であり、被害は中部地方以西の全域に及んだ。

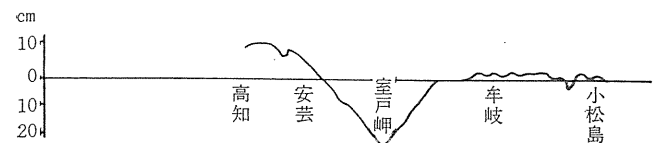
第7章 災 害
全国の死者 一三六二人に及ぶ大地震であり、中でも死者の約半数は高知県であり、高知県を中心とする大災害であった。

第7章 災 害

(南海大地震に伴った変動)



(1895~1929年の間の変動)



四国東南部の陸地の変動

(建設省地理調査所測定『南海大震災史』)

地震に伴う家屋倒壊や、津波による被害等、中村市を中心とする幡多郡や高知市は大きな被害を受けた。室戸市は震源に近く、大被害が予想されたが、地盤の関係から、他市町村より、被害の程度は軽かった。室戸警察署管内の被災状況は前表のとおりである。

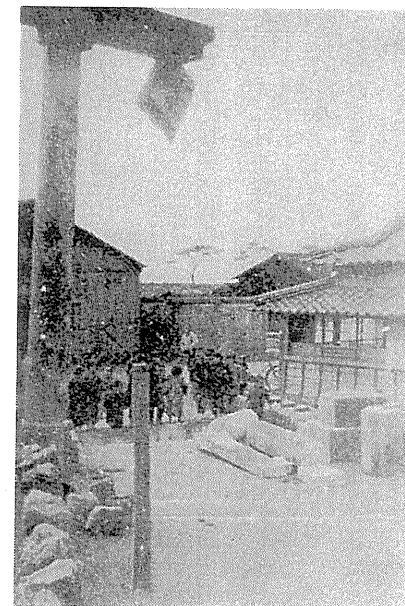
人畜家屋等の直接被害は他地区より少なかったものの、室戸半島の隆起は、震災後、港湾を中心に大きな被害となつて現れた。

室戸町の土地隆起は沿岸の水位観測で一一〇センチメートル(『南海大震災史』)とされ、室戸岬から北上するにつれ、隆起の度合いは減少し、高知市では五〇センチメートルも沈下した。

このため、室津、室戸岬両港をはじめ、高岡、三津、椎名、佐喜浜等の漁港は水深を大幅に減じ、船の出入りに支障を来すこととなった。室津港について、次の記事がある。

盛漁期を前に悲鳴あぐ——室戸港隆起で漁民の死活問題化

年間二千万円の漁獲を誇る県下随一の漁港・室戸港が震災のため海底が隆起、水深が浅くなって大型漁船の出入が不能になったことは、盛漁期を前に同港の死活問題化して急速な復旧が叫ばれているが、出漁用資材



倒れた鳥居(浮津八王子宮)

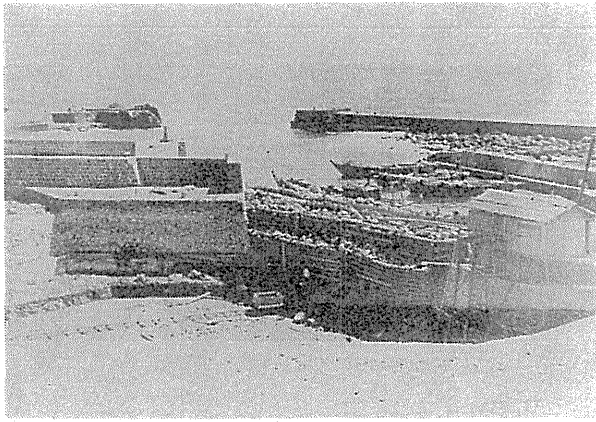
市町村別	区別	者死	衛行明不	傷負	屋家倒壊	半壊	流失	水浸	失焼	路道潰欠	畑田水浸	災罹者	船舶流失考備	
室戸市	室戸	二		三	八	三						二〇	船流失	
室戸市	根			一	七	二						二〇	船流失	
室戸市	川			一	一〇	二						二〇	船流失	
室戸市	羽			一	一	一						二〇	船流失	
室戸市	吉			一	一	一						二〇	船流失	
室戸市	佐			一	一	一						二〇	船流失	
室戸市	野			一	一	一						二〇	船流失	
室戸市	計			五	二〇	六						六二	船流失	
甲野	浦	一七		六	一	一						六二	船流失	
佐喜	根	七		四	五	八						二五	船流失	
吉良	計	一		一	一	一						二五	船流失	
羽根	計												六二	船流失
室戸市	計	二		三	八	三						二〇	船流失	
室戸市	計			五	二〇	六						六二	船流失	

(『南海大震災史』)

高知県被害状況

被害総額	被災者	耕地被害	漁船被害	浸水家屋	焼失家屋	流失家屋	半壊家屋	倒壊家屋	負傷	死亡
二七億九、二五〇万円	九三、二五九人	三、九九五	二、三八九隻	七、〇一三戸	一九六戸	五六六戸	九、九〇六戸	五、四一八戸	一、八三六	六七九人

「隆起は椎名で九十センチ、室戸港、一メートル、吉良川、八十センチ、羽根岬、七十センチ、室戸岬沖は目下調査中であるが、三メートル以上隆起している事は確実」(昭和二二・二・七「高知新聞」と語っている。



港の掘り下げ(三津港)

この隆起で、今までみられなかった礁が海面に現れ、海岸線は沖に延びて、以前の水面下の岩面が海面上に出て白くなり、海岸の景観は一変した。

地震後、東大地震観測班は、室戸町に来て水準測量をしたが、各港、船溜まりは早急な復旧事業が必至となり、多くの港が、港口を締め切って、掘り下げられた。その状況は前表のとおりである。

(昭和二二・一・三「高知新聞」)

(「南海大震災史」)

(「南海大震災史」)

復興港湾状況

復興港湾状況	復興港湾状況	復興港湾状況	復興港湾状況
港湾名	所在地	工事種別	竣工年月日
佐喜浜港	安芸郡佐喜浜町浦	防潮堤 六〇、〇米	二二、七、一五
津港	室戸町	防潮堤 五四、〇米	二二、一〇、三〇
室戸岬港	室戸岬町	荷揚場 六三米	二二、一〇、三〇
		港内浚渫 三八〇立米	二二、一〇、三〇
		水路及荷揚場舗装 八五二平米	二二、一〇、三〇
		舗装 五五一、八平米	二二、一〇、三〇
		内港護岸 一二〇米	二二、一〇、三〇
		掘削 一、二、六六五立米	二二、一〇、三〇
		岸壁 七、八〇九立米	二二、一〇、三〇
		七、〇米外四ヶ所	二二、一〇、三〇

復旧工事箇所一覽表	復旧工事箇所一覽表	復旧工事箇所一覽表	復旧工事箇所一覽表
工事箇所	事業主体	復旧工作物の種類及規模	復旧工事費
佐喜浜町	佐喜浜町	浚渫 二、〇〇〇立米	二、〇〇〇、〇〇〇
室戸岬町	室戸岬町	浚渫 二六、七五〇立米	五、〇〇〇、〇〇〇
三津	三津	浚渫 九、四二九立米	七、三五〇、〇〇〇
高岡	高岡	浚渫 五、一一五立米	四、六二〇、〇〇〇
室戸	室戸	二船か所溜 二、四〇〇立米	三、五〇〇、〇〇〇
室戸	室戸	船揚場 二、七〇〇立米	五、〇〇〇、〇〇〇
吉良川	吉良川	船溜 九、五四〇立米	四、〇〇〇、〇〇〇

一一台 風

室戸は台風銀座といわれ、古来幾度かの暴風雨や、それに伴う激浪に襲われ、大きな被害を出してきた。人々は家を建てる時、災害を予想して土地を選び、家の構造を工夫し、防風垣を造るなどして災害に備えた。幸い、昭和三十六年（一九六一）の第二室戸台風から三十年近く、大きな台風被害を受けていないが、その間に自然も生活も急激な変化をみせている。台風の歴史を顧みて、今後に備えることも大切ではなからうか。

室戸に襲来した著名な台風について書いてみよう。

(一) 大正元年の暴風雨

大正のころは台風とはいわず、時化^{しけ}あるいは暴風雨と呼んでいた。

大正元年八月二十三日正午ごろから翌二十四日の午前四時ごろまで、室戸地方に襲来した暴風雨は、その強風はもちろん、時間の長さから一大災害をもたらした暴風雨である。台風の進路の右半円の中に室戸地方が入ったと、想像されている。

羽根では、小学校の新築校舎、中川内分校、神社、寺院の倒壊、人家全壊三七二戸、半壊一六七戸、漁船の流失、海浜の松林が八分通り倒れ、戒町に波浪浸入という大被害を生じた。

吉良川でも、海岸の松がほとんど倒れ、人家にも被害が生じた。

室戸では、ほとんど被害の無い家はなく、海浜の松も倒れ、高波の襲来で船は転覆、破損、流失した。波は渡

川橋まで押し寄せたという。

津呂もまた同様の被害を被り、この時の雨量は四三二ミリの大豪雨であった。

佐喜浜でも、風が強く、屋根瓦が宇田奥まで飛んでいたと古老は語っていた。

なお、この暴風雨の最盛時には、どこも上空は真っ赤な火の玉が飛び交ったと伝えられ、被災者に対しては、災害の程度によって、御下賜金が下付された（最高二六円であった）。

この台風は、羽根を中心として被害が大きかった。その状況を当時の新聞記事に見ることとする。

惨憺たる羽根村

檜垣村長の直話

今回暴風の被害は安芸郡甚しく、同郡中にも羽根村は惨中の惨たることは既に報道したる処なるが、昨日、被害善後策に就て出高県当局を訪ひたる檜垣同村長に県庁にて会したれば、被害状況を聞くに村長は語って曰く、

▼居室全潰百七十四戸、損害金五千八百八十円 ▼同半潰八十九戸、同二千五百十五円 ▼同破損二百八十戸、同五千三百円 ▼住家以外の建物 ▼全潰百九十八棟、損害金額二万七千九百六十円 ▼半潰七十八棟、同千二百二十円 ▼破損千二百六十一棟、同八千九百九十円 ▼作物被害 米八百九十八石、代価一万六千九百円 ▼芋十六万二千貫、代価一万二千六十円 ▼船舶破壊 四十八艘、価格千二百八十円（同村の漁村は惣五十二艘にて、四艘丈は残り居るも破損甚しく大修繕を加へざれば使用に堪へずと） ▼死者一名 ▼軽傷十五名 ▼牛軽傷二頭 ▼馬一頭重傷 ▼山林九万六千円 ▼其他四千三百二十円 ▼合計十八万二千六百五十九円 ▼水害千七十円 ▼学校倒壊二棟（二棟共三十九間、巾四間半） 価額一万五千円 ▼氏神社殿全潰価格二千五百円 ▼鑑雄神社（祭神岡村十兵衛）全潰価額約五百円 ▼学校分教場一棟全潰（二間と十間）被害額約七百円 ▼惣計二十万二千五百九十九円なり、

斯の如き惨状なるを以て困窮者も非常に多く ▼食費の救助を仰ぐべきもの百十五戸、人員五百五十人 ▼己屋掛料の救助を仰ぐべきもの百三十戸、にて目下之が下付申請中なるが、食糧の救助を仰ぐべき者の目下の生計は、多くは他家の取片付けの為め雇はれ、相当賃銭を受けつつあるを以て、其の然らざるものは村費を以てて救助しつつあり、而して小学児童は村内の被害比較的僅少なりし舟場部落（役場所在地にて戸数七十四戸）の民家と役場とを充用し、全部二部教

授を為すべき準備中にて、二週間（来る十四日迄）の臨時休校を申請中なり云々。

（大正一・九・四「土陽新聞」）

被害地の惨情

羽根岬に連る東方松樹の保安林は或は根曳されて並倒せるもの其幾十本たるを知らず。或は幹の中間より捻ぢ折られたるもの其の幾百本たるを知らず。一たび之を目撃する者如何に当夜の暴風の其暴威を放恣にせしやを想見するに足る可し。而して沿道散在せる家屋は皆悉く倒潰の厄を蒙らざるものなし。更に前進して羽根の町に入る。羽根川以西家屋の大部分は或は潰壊され、或は圧碎されて未だ補ふに暇あらず。戸障子柱は路傍に積載され墜瓦落壁の道途に堆重せる惨怛なる斯の光景は、信に目を駭かし鼻を酸くするに足れりと云ふ可し。嘗て保安林中巍然として壮麗を極めし同村小学校は、今風災の厄に遭ひ、倒潰破砕されて全く毀滅に帰せるの光景は、まことに疾痛惨怛と言はずして何ぞや。而して、海岸住民の大半はおほむね漁業にのみ従事せるものなるに、今其所有の漁船は皆悉く流失し、全く彼等唯一の生業の道を絶たれたり。視よ、壯者拱手して為す所を知らず。頰白なる者道路に負殲し徒らに飢餓死を待てるの窮状に迫れりと言ふに非ずや。村長は通然出高して知事に救助の申請をなせり。予一たび徂きて之を現聞する心中戚々焉たるものあり、泣いて義人の涙に訴ふ。

此に於て、車を捨て石瓦散乱せる道路を歩行して八幡宮境内に有志竹崎神官を訪へり。君被害調査表を予に示されて、説明大に努む。其談する所によれば、同村に尚他に山間部落あり、其の通ずる径路は樹木倒錯して交通杜絶し為めに未だ精密なる情報に接せざるも、今朝一人の壮丁僅に來ることを得て其の概要を吏員に報告せり。即ち、戸数三十六を有する大岸部落は僅に二戸を余すのみ、殊に上段と稱する部落は全部倒絶に歸せりと云ふ。而して、同君の先導にて敗残せる神殿の惨状を目撃す。將に辞し去らんとするに當り、同君予に指し告げて曰く、彼の倒れし巨松は其の廻り一丈五尺あり、枝幹の風雅を以て其名高かりしに、今此の惨状なりと。

（大正一・九・五「土陽新聞」）

この台風は室戸台風以上に大きかったという古老の言もあるし、羽根役場資料には、「殊に八月以来ノ暴風雨

ノ被害ヲ受ケ、家ヲ破ラレ地ヲ失ヒタル者等ノ管外ニ転住スル者多数アリタルニ依ル」と人口減少の理由を述べている。

被害状況について、新聞記事から拾う。

吉良川村 全倒人家 二〇〇

〃 納屋 一五〇

死者 六人 負傷者 二〇名

学校、避病院 各一棟 全倒

保安林の大松樹は残ったものを救えるが早い位で、道路をふさぎ、人々は海浜を通る。

室戸町 全倒民家 二三五

〃 納屋 四〇〇

死者 二 負傷者 四

元小学校 津寺 全倒

浮津小、同高等小 大破

小船 四十 帆船 一 破砕

鯨船 全滅

室戸港口の大松樹港口に倒れこみ、船の出入妨げられる。

津呂村 全倒民家 五〇 半倒 五〇

高岡部落の被害特に大、椎名川橋（明治三十五年新架）は吹きあげられ上流十二・三間の所に墜落。

（一）室戸台風

昭和九年（一九三四）九月二十日午後六時、那覇の東方一〇〇キロメートルにあつた台風は、足摺岬南々東より、土佐



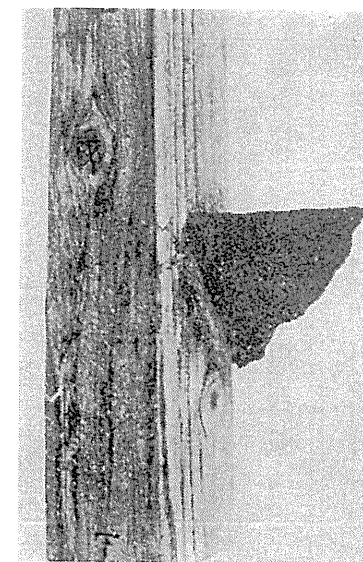
高潮による惨状（山田邸付近）

する県東部に集中した。そして、このように被害を大きくしたのは、空前の暴風によることはもちろんであるが、高潮の襲来が大きな要因となっている。波の高さは吉良川で六く七ど、室戸付近で一二く一三どに達しており、室戸岬西岸でその被害が甚大であった。

前日の九月二十日午後五時ごろ、室戸岬測候所は「暴風雨警報」を出していた。当時は今日のように情報機関が発達せず、わずかにラジオを置く家があったくらいで、警報は各所に掲示される程度であった。その夕方は、夕焼けがし、静穏に暮れていた。

午後九時ごろから次第に暴風雨となり、二十一日午前一時ごろから激浪が岸に打ちつけ、港内の船が破壊沈没するようになった。午前二時過ぎ、室戸漁業組合に、「台風は午前五時ごろ室戸方面に上陸の可能性あり」と高知測候所から警報が入った時は、電話不通、停電の状態であった。暴風は猛威をほしきままにして、家屋の完全なものも少数なく、加えて高潮は沿岸の人家を人もろともに海に引き込み陸上に打ち上げた。空前の高潮は人々の予想せぬところであり、かつ、暴風は人々の屋外に出るを許さぬほど強烈であったし、また時刻は未明であった。室戸町の状況について『高知県警察史』より引用する。

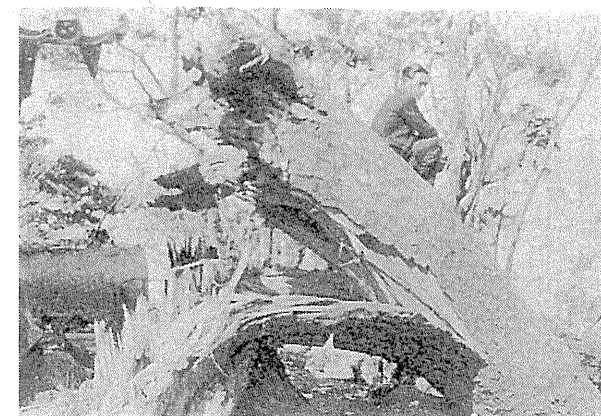
午前五時半台風通過後、直ちに応急救護活動に出たが、過半数の家が屋根をはがされ、扉や板戸も吹きとばされ、街路は家材や瓦の破片

柱に突き刺さった瓦の破片
（室戸台風の風力を物語る）

湾を通過して、二十一日午前五時奈半利に上陸、東北方に進み阪神を直撃した。これが史上最強といわれる室戸台風である。室戸岬測候所の記録によれば、二十一日午前五時十分ごろ、気圧六八四ミリバール、瞬間風速六〇メートル以上（四杯風速計のアームが風で曲がり観測できず、ダインス風力計で計るもペン先が記録用紙をはみ出す）、平均風速四五メートルという記録破りの台風であった。台風はその勢力を保って阪神を直撃したから同地方に大惨害をもたらした。

内務省警保局の調査によれば、被害府県三府三八県、死者二八六六六人、行方不明二〇〇〇人、傷者一万五三六一人、住家全壊一万四〇七〇戸、半壊二万八六〇八戸、流失二五八〇戸に及び、損害は実に八億円に上った。

県下の死者、行方不明者は一二二人に達し、家屋の倒壊流失五四三五戸に及んで、その被害は室戸市を中心と



巨松無残

が堆積して廃墟と化していた。後免・水尻・耳崎方面は、高潮のため全町流失して一面の茫々たる砂丘となり、船舶や家屋の破片が山手に漂着して引掛つていたが、住民はことごとく避難していたので一名の死者も出さなかったことは、各戸ごとの避難警告に負うところ大であった。

室戸町の被害は次のとおりであった。

死者 一〇 行方不明 四 重傷 二七 軽傷 九一
流失住家 九八 全壊住家 一四一 半壊住家 二八五
漁船流失 一六一 橋梁流失 五(両栄橋、元橋等)

室戸岬の被害は更に大きかった。耳崎、菜生、津呂、坂本に津波襲来地点の碑がある。室戸岬小中学校入り口の旧道沿いに建つ碑文からその惨状をしのぶことにする。

昭和九年颱風海嘯記念

昭和九年九月二十一日我カ室戸岬町未曾有ノ大風害海嘯ノ禍アリ此時近畿地方モ亦同時ニ未曾有ノ災ニ逢フ其ノ前日颱風来ルトノ警報アリ、人々警戒中其ノ日午前四時頃狂風果シテ至リ気圧六八四耗、風速突ニ、六十米海水天ヲ蹴ツテ怒号吼鳴シ風力猛烈ニ触ルルモ皆捲ク須臾ニ大海ノ激浪高サ四十尺轟然海岸ニ襲来スル三回之カ為メ死者六十三名負傷者三百十名、流失全潰五百五十戸半潰家六百七十八戸流失全潰船舶二百隻ニ及フ其ノ損害莫大慘憺ナル言語ニ絶ス災后満目荒涼田園見ル影モナク罹災民皆宿ルニ家無ク食フニ食無シ高知県ハ急ヲ聞速カニ米穀其他ヲ輸シ内外仁人亦全眞物質ヲ寄セ之ヲ救ハル町役場ハ直ニ仮舎ヲ建テ其ノ居ヲ給ス、

聖上陛下亦宸念ヲ勞セラレ侍從ヲ差遣シ金三千三百五十九円ヲ賜フテ之ヲ救恤サレ給フ是ニ於テ人々皆天恩ノ厚キニ感泣シ始メテ蘇生ノ思ヲナス此時損害ノ総額ハ六十七万余円応急復旧費四十八万余円ニ達ス抑モ時ニ天災事変アルハ自然ノ数ニシテ予メ之ヲ避ケンコト人力ノ及フ所ニ非ス而モ之カ民タルモ常ニ事ヲ未然ニ察シ災害ノ増大ヲ防キ且ツ平素勤儉貯蓄以テ非常ニ備フル所アレハ事ニ当リテ安祥ニ措ヲ失フ所ナカルヘシ、
今昭和十一年ハ災後三年ノ期ニ当リ町民当時ヲ追懐シ慄然ノ想アリ逝者ノ不幸ヲ哀ミ来者ハ戒ムヘキヲ思ヒ碑ヲ建テ来由ヲ刻シ后世ニ告ケントス依テ需ニ応シ其ノ概要ヲ記ス此ノ如シ

昭和十一年九月二十一日

寺石正路撰

川谷広次書

室戸岬町建

吉良川の状況は次のとおりである。

本村では台風襲来の速報に依り、午前二時警鐘を乱打して一般村民に非常警戒を促すと共に、消防組、在郷軍人分会、青年団の各団体を総出動して沿岸橋梁等を警戒して津波及颶風に備え、村民も亦それぞれ万一に備えていたが、刻々つのる風浪の暴威の前には人力を以ては如何ともしがたく、午前三時に電燈線切断して全村暗黒の中に、生きた心もなく一時も早く此の恐怖の一夜の明けんことを神に祈っていた。午前四時風向北東より南西に転じて後、風は更に猛威を加え低気圧の通過による水位の隆起、旧暦十三日の満潮と相俟って滔々二十尺に余る大風津浪猛烈として襲来、午前四時半頃風漸くおさまり、村民一同始めて愁眉を開く事が出来た。が僅々数十分大荒れに荒れた台風の猛威は、或は家を押し流し或は道路橋梁を破壊し、或は直径三尺に余る大木を倒し、芸東の築土をして忽ち惨澹凄絶唯見る荒涼たる廃墟と化しめた。本村に於ける被害の概要は左の如くである。

損害見積総額 約四十万円

死者二名、行方不明二名、負傷四十名、倒潰住家百八十棟、倒潰非住家百九十棟、半潰校舍一棟、堤防決潰延長五十間(一千三百円) 港損害六千五百五十円、道路破壊二百三十間(二千元) 舟流失六十五隻(三千五百円) 発動機船破壊流失五千二百六十円、漁具七、耕地六町(二千五百円) 農作物其他十万七百九十円 林野十六万円

(郷土基本調査)



浮津下町の被害

羽根村の被害は次のとおりである。

死者 一八 負傷者 四九
住家全壊 一〇三 非住家全壊 一四四
半壊 九五 “ 半壊 五八

〔羽根村史〕

佐喜浜では死者なく、二〇人が負傷しているが、岬以西に比べると、被害は軽微であった。

九月二十八日の「大阪朝日新聞」が、室戸署管内「死者は五十五名、なほ行方不明が二十七名もある」と報じていることは、津波の大きさを物語っている。

米等の食糧、衣類、小屋掛け材料（杉皮、板、柱等）等の救援物資は、早速二十二日夜土佐商船「湊川丸」に積み込んだのをはじめとし、次いで県水上警羅船「大鷹丸」、水産試験場「高鵬丸」を動員して送り込んだ。土佐商船の大阪航路「扶桑丸」、「浦戸丸」は大阪築港内で沈没し、役に立たなかったが、東部の沿岸航路は復旧し

救援世帯

町村	世帯数	人員
佐喜浜	二四	九四
室戸岬	三三二	一、三八九
室戸	四九九	二、〇六三
吉良川	一五九	五一八
羽根	六四	二五八
計	一、〇七八	四、三三二

〔大阪朝日〕高知版

救援物資を運んだ。ただ、羽根には寄港せず、吉良川に陸揚げして運ばねばならなかった。二十七日に、ようやく道路も何とか通じて、海陸から救援物資が届くようになった。

救援世帯人員は県下で一四九七世帯を数え、うち、室戸市は一〇七八世帯（七二パーセント）を占め、この災害が室戸、室戸岬町を主とした室戸市に集中したことを示している。町村別被救援世帯人員は表のとおりである。

県は初め救援対策本部を室戸町に置いて、救援に当たり、トラックを建て、生活物資を配給する等援護に努めたが、天皇は久松侍従を派遣し、十

月一日、室戸、室戸岬町を視察して見舞金を賜った。

この災害は家屋家財等生活の基盤を奪っただけでなく、生産手段である漁船、漁具を破壊流失させたことも痛手を大きくした。室戸、津呂で特に被害が大きく、港も大きな被害を受けたが、それを除いた漁家の被害だけでも、室戸岬町三二万円、室戸町三二万円に達した。県では、早速罹災漁民に、九月三十日までに、高知市付近から四〇艘の船を譲り受け、被災漁村に回航して漁民が交替で使用し、生計の途が立つよう配分した。さらに、三万円で漁船三〇〇艘を急造して配給する計画を立てるなど、生産の基盤整備に動いた。

（三）その他の記録

貞享四年（一六八七）の暴風雨

「浦司要録」（土佐藩の浦奉行所の公式記録）に次の記事がある。

- 一、福島より甲浦迄之内当九月九日風雨ニ家数千百五拾四軒潰申候事（注 福島は現土佐市）
一、右同日之風雨ニ福島より甲浦迄浦人共諸材木薪共浜へ出し置或ハ山本ニ仕置候共ニ拾端帆六百拾艘荷之積并松根五百斤地引網三張靱麦拾式石余鯨網百八拾式端苧三拾七丸浪打流拾候事
一、右同日風雨ニ福島より甲浦迄之内人数男女拾六人牛馬三疋浪ニ流或ハ潰家敷相果候事

享保十五年（一七三〇）の暴風雨

室津港湊番久保野家の記録に次の記事がある。

- 同十五年七月二十四日（新曆九月六日）夜大風雨、室津浦御米蔵一軒、三間ニ十間ノモノ吹き潰サレ、其他民家六十軒吹き潰サル、東寺塔堂二重ヨリ上吹落サル、伽藍上灘筋大破損アリ。

明治三十二年（一） 九月八日室戸村を中心として暴風雨に見舞われた。新聞記事より要約する。

八九九)の暴風雨 「室戸村は、八月二十八日激浪が襲い、人々は二百十日を氣遣っていたが、それも大したことなく過ぎほつとしていた八日、午前六時ごろから風雨が強くなり、八時に上み風が猛烈に吹き荒れた。人々は戸を閉めて夜のようにランプの明かりで風のやむことを祈っていた。午前十時半、風は反対方向の西北より吹き始め、一層激しくなつて、室津港開港と同時に植え付けた大松樹は無残にも根元から倒されたり、中央から裂けたりして無残な姿になった。室津港の近くにあった役場は、大松が倒れてきたが、わずかに尺余の差で難を免れた。しかし、西隅は吹き飛ばされた。港まわりにあった捕鯨網庫は大破壊を被つて網に大きな被害が出た。後免西端の某家は大松が倒れたが、尺余の差で難を免れた。境町の中井為助は、風のさなかに土蔵で什器を片付け中、一陣の旋風で家の両側にあった幹回り丈余の老松が土蔵に倒れ込んできたが、辛うじて九死に一生を得た。しかし、この松は納屋を全壊させ、損害は四〇〇円になるだろう。郷の山田酒造は瓦だけで一五〇円の損害である。室津尋常小学校は大損害を受け、校舎は五寸余り前にずれている。浮津尋常小学校、浮津水産補習学校校舎や、水産補習学校の缶詰製造所も瓦を見事にはぎ取られた。中でも浮津捕鯨会社は、明治二十年新築の高大強固な建物であったが、大損壊を被つた。室津八幡宮は、明治十年新築のいわおのように丈夫な建物であったが半壊となり、損害八〇〇円である。鳥居は花崗岩造りであったが、上部が吹き飛ばされた。こんな暴風雨は古老に尋ねても知る者はなく、室戸村の損害は三万円を下らないという。」

「被害の一斑は次の如し」として、

○新村 全倒三棟、漁船三、○行当 全倒一五棟 ○崎山 およそ五〇戸がごとく大破壊 ○松の全倒、中央よりの全損、およそ四〇本 ○大谷 全倒四三棟 ○浮津より室津の町通りにおいて 全倒五棟、半倒八棟、同納屋全倒三棟、

半倒七棟、便所釜屋等の全棟半棟も多数 ○神社全倒一棟 ○津寺鐘堂一棟 ○土佐缶詰製造所煙筒(二丈余の高さ)一等が記載されている。

この被害は概して、浮津八分、室津二分、津呂は比較的室戸より損害が少なかった。

明治三十七年 九月の激浪 明治三十七年九月十六日、激浪が襲い、津呂村椎名に大きな損害を与えた。

椎名海嘯被害の詳報 安芸郡津呂村椎名の海嘯に就ては既に本紙に記載したる所なるが、今同地より詳細なる通信を得たれば重復の個所あるも、之を再記せんに去る十六日同地は昼頃より天候險悪の模様にて狂瀾怒濤起りたるを以て、村民は一同海岸に出て船舶の始末を為し警戒を加え居たるも格別の事も無く、且つ秋季の時節とて有りがちの事なれば、避難の準備などは為さず其まま打ち過ぎ居たるに、午後七時頃に至りて次第に高浪の模様に変ぜし故部落人民は互ひに相戒め、海岸附近のものは家財雑具の取片付けを為したるも、同地の宅地等へは往古より激浪震来せし事かつて無ければ左して心配もせず、安閑として在りしに午後九時半より十時の間に於て、俄然激浪怒濤は空を捲きて襲来し来り。ソレと云ふ間も無く忽ち岸上につなぎありし浮漁船を捲き樹木を折り、二度目には家屋其他の建築物を破壊し海中に引き込まんとする勢に、村民は周章狼狽してアレよくと泣き叫ぶ有様誠に修羅の巷とも譬ふべく、西に東に逃げまどふ老幼男女の惨状は目も死てられぬ程なりしが、土地の区長及び有志者は率先して東奔西走救護に尽力したるも、何分暗夜の事とて充分に其効を奏する能はず。遂に溺死及び庄死男二人、女三人、負傷男九人女十人、家屋建物の破壊五十七棟、浸水家屋十二戸、其他田畑道路橋梁等悲惨なる損害を見るに至れり。然るに同地は津呂村役場及び駐在所を距る三里余の土地なれば、此の惨状の急報を得たるは翌日午前七時頃にて、村長並に吏員駐在巡查は報を得るや直に出張して尚ほ、田野分署長及び室戸出張所の巡查部長等も出張して負傷者に応急手宛又た検視を為し、被害の状況を取調べたるが、実に今回の激浪は同地未曾有の高浪にて、高さ四十尺以上に及び椎名橋を打ち越し椎名以東佐喜浜村に至る県道は大破壊を為し、殆んど原形を認むる得ざる程なりと云。

この激浪は安芸郡東部一帯に大きな被害を及ぼしたが、その様子は次のとおりである。

津呂村津呂 被害家屋 一七(内流失五)

死亡 四 負傷 一九

小船 三 道路損壊 数百間

佐喜浜村 全倒家屋 九 半倒 八

他全倒 一五 道路 千余間

昭和三十四年(一九一九)九月二十六日、台風一五号によって、佐喜浜町都呂は大被害を受けた。この台風は超大型(五九)伊勢湾台風、型台風であって、全国に大きな爪跡を残した。特に伊勢湾沿岸に大被害を与えたので「伊勢湾台風」といわれる。小山のような波が六メートルぐらいの防潮堤を越して都呂地区を一瞬のうちに打ち砕いてしまった。この大波で、死者二名、重傷八、軽傷約二〇、住家流失全壊三〇、半壊三二、非住家流失四〇、半壊一四、被災世帯五三の大損害であった。

隣町野根でも六八戸が流失全壊し、岬陽地区は各地で波浪により道路が決壊し、一時交通が途絶した。二十一日午後三時半ごろの一瞬の出来事であった。この復旧工事として都呂の防潮堤は強化され、国道五五号も防潮堤に沿う現国道に路線が変更された。

昭和三十六年の 九月十六日襲来した一八号台風である。十六日午前十一時四十七分、室戸岬測候所は瞬間最大風速八四・五メートルを記録した。これは台風の目通過後の吹き返しで、記録された記録破りの強さであった。岬一帯の山は潮風による塩害で一時枯れ山の様相を呈し、農作物や土木関係で大きな被害を出した。



伊勢湾台風(国道に打ちつける波)室戸岬町鹿岡

その他

室戸は災害の常襲地であるが、今なお人々の記憶に残されているものには、昭和十七年、大雨による室戸岬町の高岡の鷲ヶ谷の土砂流失等の大水害や、近くは、終戦直後の二十一年九月十七日の枕崎台風等がある。この台風は人畜の被害はないものの、出穂期いもちぎの稲が真っ白になるほどの風害を受けて、収穫皆無に近く、戦中、戦後の食糧難に拍車をかけた。当時は増産のため晩稲を作っていたが、この痛手が台風を避ける早稲に切り替える契機となった。

また、昭和四十一年五月二十日から降り出した集中豪雨は、特に椎名から佐喜浜へかけて大きな被害を与えた。椎名の清水地区では山崩れにより、五戸の民家が跡形もなく埋没し、今も土砂の下にある。猪ノ谷山が崩れ約一〇万立方メートルの土砂が海岸まで埋め尽くし、幅二三〇メートル、二・八メートルにわたって田畑も国道も土の下に埋めた。土砂の厚さは中央部で三〇メートル、国道上でも八メートルあった。飛鳥にある椎名小学校は

三分の一ぐらい土砂に埋まった。椎名では一人行方不明者が出た。佐喜浜地区は尾崎橋をはじめ、道路の決壊、橋の流失が多く、陸の孤島と化した。高知地方気象台発行の『高知県の気象』によると、佐喜浜九〇八メートル(一時間六三)、野根六〇七、行方不明二、全壊一四、床上浸水二三〇、床下六六七と記録されている。